さらしなの里

「友の会」だより

第13号　　2005・秋

信濃の国踊りを披露する更級小学校の保護者
今年９月１７日　石井智校長撮影

40年続く信濃の国踊り

更級小学校の運動会で、ＰＴＡ主催で踊られている「信濃の国踊り」は、わかっている限り昭和四十一年（一九六六）から毎年、踊られているようです。扇子を使って詩吟に合わせて踊ります。日本舞踊のようでもあり、大変格調高い踊りです（その分難しくもある）。

信濃の国は信濃教育会（長野県の先生方の団体）の依頼を受けた長野県師範学校教授の浅井洌（きよし）が明治三十二年（一八九九）に作詞し、同教授北村季晴（すえはる）が作曲したものです。意外にも信濃の国が長野県歌に制定されたのは昭和四十三年なので、本校の信濃の国踊りが始まったのは県歌に制定される前からとなります。

信濃の国踊りは明治三十三年秋、師範学校の運動会で女子部の遊戯（ダンス）として発表されました。師範学校を卒業し県内各地の小中学校に赴任した教員たちによって「信濃の国」が唱歌と遊技の二つの形で児童生徒に伝えられたことが、信濃の国をあまねく県下に広めることにつながったと思われます。なお、更級小校歌の作詞者も浅井洌です。

本校の踊りが発表された当時の「正調信濃の国踊り」であるかどうかわかりませんが、この伝統を大事に受け継いでいってほしいと思います。**（更級小学校長・石井智）**

大谷秀志会長が死去

「さらしなの里友の会」の大谷秀志会長が九月二十二日、お亡くなりになりました。

大谷会長は大正五年（一九一六）旧更級村須坂に生まれました。更級村公民館副館長、元労働大臣倉石忠雄さんの秘書官を経て、戸倉町長、県議会議員を務めました。

平成四年（一九九二）、「友の会」発足時からの会長で、縄文まつりでは村長となり、まつりを主宰しました。まつりを通じての子どもの「健全育成」にご熱心で、写真は第二回、今から十二年前のお姿です。

歌碑に「さらしな」を刻んで

七月二十八日には、「さらしな」への深い愛着を込め大谷会長が詠んだ歌碑が、縄文まつりの舞台である古代体験パーク近くの雄沢川沿いに建立されたばかりでした。歌は「冠らきの山の麓の墨坂は　月に名高き更科の里」。黒の御影石に自筆で刻んであり、正面は冠着山を望んでいます。

友の会だよりの題字「さらしなの里」も大谷会長の筆によるものです。当会と地域へのご貢献に衷心よりの御礼とともにご冥福をお祈り申し上げます。

……

「栞（しおり）の会」の創立から二年がたちました。集まってくるみなさんの思いは姨捨山であり、月と姨捨、さらしなの里の歴史と文学、そして山容の美しさをまず自分たちで認識するとともに、多くの人たちに知ってもらいたい、広めたいということであります。一部には栞の故郷をブランドとして位置づけ、経済など千曲市の発展に結びつけたい、また冠着山を千曲市のシンボルとしたいなど、それぞれの考えがあるようです。

この会のフルネームは栞の故郷推進実行委員会です。なぜ栞かということですが、語源が枝折ということから、姨捨伝説にある背中の老婆が息子の帰りのために道々、枝を折ったという話を引用し会の名前としました。会の創設や音頭とりは千曲商工会議所の広報部が縁の下の力持ちとなり、千曲市の援助も受け行っております。

創立２年目の「栞の会」

昨年の第一回は姨捨山（冠着山）登山で大池から山頂まで枝を折りながらの想定で、百五十人が参加しました。山頂で姨捨にまつわる話、地元児童や語り部のみなさんの発表など、むすびをほおばりながらのイベントを行いました。

二回目の今年は九月十七日、長楽寺から四十八枚田、姨捨棚田、姨捨孝子観音のある展望館、さらしなの里古代体験パークへとウオーキングを行い、イベント「名月の宴」に合流しました。展望館では御詠歌、民話、更級の歴史、孝子観音の説明披露など、多くの参加者を得て行われました。

（栞の故郷推進実行副委員長・西澤英治）

すべての音がバランス良く

千曲市羽尾の高校教諭、上水清さんが、第二回アマチュアギター製作コンテストで優勝しました。学生時代に熱中したギターを自分で作ってもう一度弾きたいと、十年ほど前から取り組んでいらっしゃいます。コンテストの様子について上水さんからご寄稿をいただきました。

五月三日朝、私は茨城県の八郷町に向かって出発した。車のカーナビが一路コンテスト会場「ギター文化会館」への道筋を示して案内を開始した。運転中の私は終始寡黙であった。コンテストの予選を通過すれば、もしかしたら良い結果が得られるかもしれない。しかし、二年前のコンテスト（三位入賞）の状況を知っているだけに、全く予断は許されない。

あの時の熱気は異常とも言えるほどであった。今回の出展者はたくさんの情報を得て高い目標に向かって挑戦してきたに違いない。この間のレベルアップは計り知れない。海外からの出展者もいるらしい。

私は、あの時以来、五台のギターを作った。正直言って今回のコンテストが本当の挑戦であった。私の場合、一つのモデルを基本に追求している。モデルを大幅に変えると、音とギターとの因果関係がつかめないからだ。「一つのモデルに少しずつ変化をつけて、音色の違いを追い求める」という想定のもとにある。

ギター製作アマ日本一の上水清さん

優勝を競う三十四台のギターが会場に陳列されていた。一般参加者を含めて誰もが試奏できることになっている。午後三時から開会行事に引き続いて予選が始まった。プロのギタリストが全てのギターに適した数分程度の曲を弾いて、審査員が音色を審査した。その後、別室で製作技術を徹底的に審査して、本選出場ギター六台が選ばれ、次の日の四日に本選が行われた。

本選も二人のギタリストがそれぞれ六台のギターを弾いて、審査員は音色だけで順位をつけた。「全ての音がきちんとでていて、音のバランスも良く、いろいろの曲の演奏に使用可能な楽器」という高い評価をいただくことができた。

私はこの機会を通じて改めてギターの奥深さと素晴らしさを知った。これからも私は天使の誘惑に身を委ねるがごとく、見果てぬ夢を追い続けるでしょう。**（上水清）**

おらほの冠着 ⑬

毎夏社前で一泊のおこもり

冠着神社の例祭は七月二十八日。その前日二十七日には祭典取締一同が山頂に登り、社前に一泊する。これが「おこもり」。神前に宿って祈願をかけることで、まことに敬虔な行事である。

この慣習がいつごろ始まったかは定かではないが、ずいぶん古くからの行事であるのは疑いない。ものの本によると、全国のお宮では、お祭りの前の物忌みとして、こういう風習が行われていたそうだが、だんだんすたれてしまっているという。先ごろの新聞に、筑北地方のお宮でおこもりが行われており、大変珍しいことと紹介されていた。

おこもりでは善光寺のおこもりが有名だ。一晩あのご本堂に泊まり、一心に念仏を唱えていると如来がお姿を現すという。

また武水別神社八幡宮の大頭祭では祭りの前、「うかい入れの式」で頭人以下五役は家人と別れて別室にこもり、忌みに入る。これも神に近づくおこもりである。

冠着さんのお祭りには、どんな日照りの年でも必ず雨が降ると信じられてきた。神さまはおこもりを続ける篤信の村人に恵みの雨を与えられていたのだ。

大正生まれのご老人が「子どもの時、村役人と一緒に焼きもち持って登ったもんだ」と話された。昔は村人も一緒に登っていたようだ。焼きもちとはナスの焼きもちのことだ。

おこもりの風習が古くから続いたのはなぜだろう。遠く縄文、弥生の時代、さらしな人は冠着山を恵みの山として崇めてきた。山そのものがご神体だった。さらしな人の血の中には、五千年前の山に対する信仰が遺伝子として沈着し流れているのだ。時期になると、その血が目を覚まして山へと向かわせている。

（塚田哲男）

〈編集後記〉 故大谷秀志会長の葬儀・告別式が十月一日、JAちくま虹のホールで執り行われました。葬儀委員長の滝沢弘旧戸倉町長は弔辞の中で、自らが昭和三十七年（一九六二）、町職員に採用される際、当時の大谷町長の面接試験を受けたと述べられました。時代を感じさせられるエピソードです。

前号でご寄稿いただいた都道府県対抗男子駅伝長野チーム監督の西沢民雄さんに続き、さらしなの里にもうひとかた、日本一が誕生しました。優勝した上水さんのギターは九月十七日の「名月の宴」でプロ奏者の岩村通康さんによって音色が披露されました。信濃毎日新聞五月三十一日付に上水さんの紹介記事が載っています。

奇しくも更級小運動会と栞の里ウォーキングも、名月の宴と同じ九月十七日に行われました。郷嶺山にある「さらしなの里展望館」で昼食を食べているとき、信濃の国踊りの曲が里中に響き渡っていました。

さらしなの里友の会事務局
〒389―0812
長野県千曲市大字羽尾二四七の一
さらしなの里歴史資料館内
電話026(276)7511
FAX026(261)4161